

南方戦域転戦回顧

福島県 原 源 司

私は大正十（一九二一）年七月二日、福島県耶麻郡熱塩加納村大字宮川字半在家に生まれました。徴兵検査は昭和十六（一九四一）年四月で、甲種合格でした。

入営は昭和十七年四月一日、仙台の第二師団野砲兵第二連隊補充隊第四中隊です。

入営当時の私の家族は

祖父	健在	農業、山林
祖母	〃	〃
父	〃	〃
母	〃	〃
本人（長男）	〃	〃
弟（次男）	〃	海軍へ志願兵
〃（三男）	〃	商業学校生

〃（四男）〃 小学生

と八人家族で、私が兵役に服することは一家の経済に与える打撃は大したことはありませんでした。

村では私一人が入隊でした。前日仙台の指定旅館で一泊、翌日独りで元氣に入営しました。その間、初年兵教育の助手もしました。

ちょうどこの頃、南方のガダルカナル島作戦のため、悲惨きわまる大苦戦を続行し、第二師団の会津若松の歩兵第二十九連隊長古宮大佐は軍旗とともに玉砕、連隊は壊滅的打撃を受けました（ちなみに日本陸軍内でも会津若松連隊の夜襲のすさまじさ、精強さは定評があり、日露戦役でも抜群の戦功を誇った）。

野砲兵第二連隊もガ島に上陸し、大いに健闘しましたが、大勢のおもむくところは非もなく多大の犠牲を出して敗れました。思うに源義経の戦例にならない敵の背後を急襲し、夜襲の総攻撃という戦法は既に古く、新時代の科学的戦法には惨敗するのみという戦況状況でした。このことを大本営その他軍司令部に理解されなかったことが、インパール作戦でも如実に示されて

おり、痛ましい戦訓と思わざるを得ません。

当時の第十七軍（百武中將軍司令官）の報告によりますと、

ガ島上陸兵 三三、〇〇〇人

戦 死 四、五五〇人

戦 病 死 四、三〇〇人

行方 不明 二、三五〇人

計 二一、二〇〇人

となっています。なお、戦争榮養失調症と病名をつけられて帰還した者一万人となっています。

また海軍は六回にわたる海戦で、戦艦「比叡」「霧島」以下二四隻、航空機八九三機、輸送船は数十隻が沈没し、文字通り太平洋戦争の帰すうを決めたのです。

このうち東北健児の戦死者は、昭和十八年七月十六日各連隊発表によれば計七、五一五人、内訳は

宮城県 二、二七四人

新潟県 二、六九三人

福島県 二、五四八人

ガダルカナル島作戦は以上の大失敗と大損害により、昭和十七年十二月三十一日、大本営では陛下の英断により、ガ島上陸の兵力を撤収するよう大命が降りました。

この大命により勇師団（第二師団）はフィリピンへ転進しました。師団も連隊もすべて兵力の補充と再編成をはかり、新しい陣容で力強く再生し、マライを経てビルマに新天地を求めて転進したのです。私達十六年兵はこのフィリピンでの補強再編に符号するように仙台を出発し、南方の本隊に転属合流して行つたのです。

野砲兵隊はダウに、師団司令部はガバナツアンへと進駐し、付近の警備と訓練に励みました。十月漸く行動を起こしマニラ出発、敵潜の攻撃をさけてボルネオの南方海上を迂回してシンガポールへ入港、ここで一泊、マレーのクアラルンプールへ。さらに一月五日ここを出発してビルマへ向かいました。

私は仙台よりフィリピンへ移り、本隊に補充され、

連隊本部勤務となりました。

ビルマ領内では連隊主力が海岸線に陣地構築を終わ
り、昭和十八年徴集の初年兵が教育に汗を流している
頃、ビルマ戦線は大きく揺れ始めていました。例の悪
名高いインパール作戦の発起命令が下され、第三大隊
が参加しました。

一方、第二大隊は「悪魔の谷」と呼ばれたフーコン
方面に転進して「八号作戦」に投入されました。ま
た、敵の空挺部隊により陣地を占領されるという特殊
な戦場で、第二大隊は機甲部隊を核心にした強固な円
筒陣地と敵機の跳梁に苦しみながらも最後まで戦い抜
き、大部分の火炮を自爆し、累々と重なる屍の山道の
峠をこえて死地を脱出しました。しかもその余力をふ
りしほって、八月急を告げる竜陵へと馳せ参じたので
した。

昭和十九年七月、ビルマ作戦の最後の賭けと言われ
た「断作戦」が發起されました。連隊本部、第一大
隊、第十、第十一中隊は第二師団主力と共に北ビルマ
へ急進、緬支国境を通過して雲南省へ入りました。

折しもビルマ全戦線随一の橋頭堡としてその堅塁を
守備していた竜兵団（第五十六師団・久留米）の「拉
孟陣地玉碎」（九月九日）の悲電が飛びました。この
悲報は並列して前進する「勇」「竜」両師団に衝撃を
与えました。弔合戦の気魄に燃えた両師団は、十五対
一の兵力比をもとめず、怒濤のように押し寄せる
敵兵を粉碎して、竜陵東西の線に敵をガッチリと食い
止めたために、戦線は膠着状態に突入しました。

この頃、軍の左翼方面を担当していたバーモ守備隊
は、敵に完全に包囲されて突入戦闘に移りました。こ
のバーモ守備隊に配属されていた第二中隊は、全火炮
を自爆し、歩兵とともに白兵戦を敢行、その過半数の
兵力の四十五人を失いました。後日このバーモ守備隊
とその救援隊に部隊感状が出されましたが、東北兵と
九州兵が涙で抱き合う場面もあったといいます。

九月二十六日、第二師団主力の「断作戦」離脱命令
が下され、「断作戦」は第二期に移行しました。第二、
第九の両中隊は歩兵第四連隊の配属となり、この二個
中隊を残して十月一日、連隊の主力は雲南の戦線を離

脱して、中部ビルマのミョラに集結しました。

思えば、仙台出発以来、我が連隊の主力が一カ所に集結したのは初めてのことでした。しかしこの集結と再会も敵の大機甲部隊のメークテラー飛行場占領によって長くは続かなかった。戦局の急変によって、連隊の各隊はまたもや北と南とに袂を分かちつ運命にあつたのです。

ビルマ残留の二個大隊（第一、第三大隊）は、イラワジ河畔の「盤作戦」に急行し、引続き「克作戦」（ビルマ撤退作戦）に投入されました。この戦場はビルマの人平原であり、対戦車戦闘の核心戦力は砲兵でした。また撤去する部隊を收容援護するのも砲兵でした。砲兵魂はいかなく發揮されたけれども、兵力の犠牲も少なくなかった。両大隊が全火砲をビルマの泥土に埋め、互に励まし合いながら、シャン高原を越え、連隊主力のいるサイゴンに原隊復帰したのは、ミョラでの南北決別より六カ月後の昭和二十年七月三日のことでした。

ビルマ作戦をふりかえって見ると、昭和十九年正月から翌二十年七月まで、わずか一年七カ月にすぎない。しかし野砲兵第二連隊は、アキヤブ作戦の初期から、ウ号（インパール）、八号（フーコン）、断（雲南）、盤（イラワジ河畔）、克（ビルマ撤退）作戦の末期にいたるまでビルマの全作戦に参加したことになります。

思えば、我が連隊は、ビルマ全土にあますることなく、その足跡を残したとも言えます。従つてその尊い犠牲者も、その数は多くそれはジャワ、ソロモン（ガ島）作戦を上回る六百人余にも及んでいます。

次に仏印作戦について。

昭和二十年二月末、第二師団主力と行動をとみにしていた連隊主力は、夜を日につぐ急行軍で二〇〇〇キロを大転進し、カンボジアに駐留して次期作戦を準備しました。

私は二十年二月頃「原兵長は部下四人を伴い石井連隊副官に同行すべし」との命令を受け、カンボジャの

ブノンペン付近の竹藪へとの先発に転進しました。そして「明号作戦」の準備をしました。

その当時の仏印の情勢は、仏印は日本に対して宣戦布告していなかったが、いろいろと敵対行為が多かったのです。松本全権大使が仏印の総督に対して「二十年三月九日午後十時を期して、無条件降伏をするか、否か？」との最後通牒を突きつけたのです。

〔註 「明号作戦」とは、反仏クーデターのこと〕

野砲兵第二連隊の我々はメコン川沿いに陣地を布いて、メコン川を下ってくる仏印の敵を待ち受けていました。何事もなく平穩にすぎ、明号作戦は終わりました。五月三日サイゴンへ移駐、野砲兵連隊長石崎大佐を長とするサイゴン警備隊を編成、警備と陣地構築をしました。そのような状況の所へ、七月三日待ちこがれていた第一、第三大隊のビルマ生き残りの勇士たちが、サイゴンへ追及してきました。

私は郵便局の防空司令所（佐藤軍曹が長）にたてもり、仏軍より接收した通信機で敵状（仏の飛行機が

どんな要領で飛来するかとの）を各隊に流しました。二カ月で交替しました。

サイゴン市内でトーチカを作ることとなりました。コンクリートのセメントが無いので、チーク材で作るべく準備をし、經理の伍長と車十台をつれて、材木商へ行き、チーク材を引き取って帰りました。

八月十五日正午、重大放送があるとのこと。放送は不明瞭で主旨はどうやら「最後の一兵まで戦え」とのことらしい。もちろん覚悟の上のこと、みんな頑張つてやろうということで落ち着きました。ところがそのうち、本部の兵技の曹長が「どうもおかしい、負けたんじゃないのか？」と言い出して騒然となり、そのうち師団司令部その他の高級司令部より「降伏」と伝えて来ました。

宮様が陛下の命令書を持って、説得に来られるとのこと。無条件降伏が確定して、私達は半年分の給料をもらいました。

一切の軍事行動を停止している日本軍の前へ、上陸

して来た英・仏連合軍は、ベトナム独立開放軍の戦闘行動により、サイゴン市内を一步も外に出られないほどでした。そのために連合軍は一度行動を停止していた我が連隊に再武装を命じ、連合軍の指揮下で、解放軍ゲリラの掃蕩作戦に参加することを要求してきました。このため九月十二日は連隊の各隊は、現在位置で再武装することになったのです。誠に不本意な戦闘がこれ以後五カ月も続きました。この作戦で連隊は、またも五十人余の尊い命を失いました。

昭和二十一年二月、独立解放軍をサイゴン郊外へと駆逐したのち、連隊はソドックで英軍に対して降伏式を行い、武装解除を完了、終戦処理が始められました。

噂によると、軍紀風紀の厳正な部隊より内地へ帰すとの司令部命令のよし。第二師団は軍紀風紀の良い部隊だから、二十一年五月待ちに待った内地帰還が始まり、リバティー号に乗り、十二、三日で大竹（私は鹿児島）へ入港しました。行く時はいずれも一カ月以上

の航路でした。

荒廃した祖国の姿、それでも美しい日本の山河を眺めながら、全将兵は感激して港から宿舎まで、四列縦隊で行進しました。しかも堂々と歩調をととのえて、しかしこれが、我が連隊の最後の勇姿でした。そして臨時動員降下の昭和十六年十月から数えて六年目にして、我が野砲兵第二連隊の榮譽ある歴史は、その幕をとじたのでした。

私達鹿児島上陸組は、上陸一時間前に階級章は全部外しました。そして天保小学校へ集結しました。その時の連隊長の訓示を左にかかげます。

「野砲兵第二連隊の歴史は七十年で終わった。敗北の歴史ではない。残念ながら世はアングロサクソンの支配する所となった。故郷へ帰ってもその誇りを捨てずと頑張ってくれ」

昭和二十一年五月十六日、懐かしい我が家へ着きました。予め電報を打っておきました。同年兵が一週間早く復員していたので、家では模様は全部分かってい

ました。

五月十六日家へ着きました。母が「お前の嫁はもう決めておいたぞ」と。

私の軍隊での労苦と言っても

1 歩兵のように歩くことはない車両部隊。

2 連隊本部勤務。

で労苦は少ないと感じています。ただ不満であったことは進級の事でした。昭和十八年進級の時、上等兵より兵長になれず進級が一回おくれました。人事係曹長さんが「くやしいだろう」と言ってくれました。連隊本部の将校下士官全部が私を推薦してくれたのに、連隊副官が筆耕の上手な者を推薦して私は落ちたのです。次に伍長に任官の時は私が一番となり、前の兵長の時の雪辱を遂げる事となりました。

結婚は昭和二十一年十一月十七日に式を挙げました。現在妻も元気で子供は男女男と三人です。孫は男ばかり三人。曾孫は女一人。

復員後の地域の役職を振り返ると

1 消防分団長

2 部落の区長

3 農業委員 五期（一期三年）この内会長三期

4 会津北部土地改良会会計理事三期（一期四年）

5 加納村土地改良会会計理事一期三年

6 加納村文化財審議委員会副会長二十年

7 加納村郷土史研究会会長三年

8 小中学校 PTA会長

家庭では花のハウス園芸十三年、収益はまずまず。

学校同級生九人戦死、その内七人は特攻。

同級会長 満八十歳の同級会二十三人出席。

龍兵団

ビルマ戦線より還る

佐賀県 岸 川 力 蔵

私は大正十（一九二一）年十月に生まれ、昭和十六（一九四一）年徴集兵であります。現役入営ではなく、昭和十七年四月に応召され、久留米歩兵の第一四